



立風書房

山田洋次作品集
5

山田洋次作品集 4



1979年11月10日 発行

¥ 1,300

山田洋次作品集 4

山田洋次

発行者——下野博

発行所——株式会社立風書房 東京都品川区東五反田3の6の18

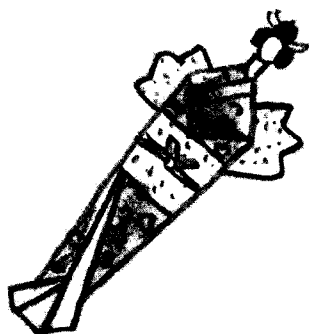
振替——東京五——七四四九三

印刷所——信毎書籍印刷株式会社／株式会社美術版画社

(乱丁本・落丁本はお取替えいたします) 0095—R6304—8909

思い出づくり

山田太一



大和書房

男はつらいよ

3

続男はつらいよ

71

男はつらいよ・望郷篇

149

男はつらいよ・奮闘篇

223

それを言っちゃおしまいよ

296

解説Ⅱ 松村達雄 太宰久雄

299

装幀・多田進
装画・出川三男

男はつらいよ

監編照錄美音撮 脚製原

督	集	明	音	術	樂	影		本	作	作
山	石	内	小	梅	山	高	山	森	上	山
田	井	田	尾	田	本	羽	田	崎	村	田
洋		嘉	幸	千	直	哲	洋			洋
次	巖	夫	魚	代	純	夫	次	東	力	次

1969年8月27日封切

爛漫たる桜

ここは葛飾の水元公園。満開の桜の花。

この物語の主人公、寅次郎の張りのある声が聞こえて来る。

同時に情景をバックにクレジット・タイトル続く。

寅のナレ
「桜が咲いております。懐かしい葛飾の桜が

今年も咲いております……思い起こせば二十年前、つまらねえことで親爺と大喧嘩、頭を血の出るほどブン殴られて、そのまんまブイッと家をおん出て、もう一生帰らねえ覚悟でおりますものの、花の咲く頃になると、きまって思い出すのは故郷のこと、……ガキの時分、鼻垂れ仲間を相手にあばれ回った水元公園や、江戸川の土手や、帝釈様の境内のことでございました。風の便りに両親も、秀才の兄貴も死んじま

って、今はたった一人の妹だけが生きていることは知っておりましたが、どうしても帰る気になれず、今日の今日まで、こうしてご無沙汰に打ち過ぎてしまいました。今こうして江戸川の土手の上に立って、生れ故郷を眺めておりますと、何やらこの胸の奥がポッポッと火照って来るような気がいたします。そうです、私の故郷と申しますのは、東京葛飾の柴又でございます」

画面はいつしか、帝釈天の参道を経て、江戸川の土手の上になっている。

江戸川・土手

メイン・タイトル——男はつらいよ。

寅の声「私、生れも育ちも葛飾柴又です。帝釈天で産湯をつかい、姓は車、名は寅次郎、人呼んでフーテンの寅と発します」

の冴えた仁義がはじまる。

へドブに落ちてても根のある奴は

いつかは蓮の花と咲く

意地は張っても心の中じゃ

泣いているんだ兄さんは

目方で男が売れるなら

こんな苦勞も

こんな苦勞もかけまいに

かけまいに

矢切の渡し

「大人30エン小人20エン」と書いた立札の立
っている船着場。

昔懐かしい和船の渡し船が対岸目がけて出て
ゆく。ヘサキに立ってうっとりと流れる水を

眺める寅。

川岸のゴルフ場

寅、良い気持で悠々とグリーンを横切ってゆ

土手の上

く。足元にコロコロと転がって来たボールを
拾い上げ、ボーイとゴルフファーに投げてやる。
ゴルフファー、ボールをうけ取り、呆氣にとら
れて見送る。

春風に吹かれながらゆく寅。

風に乗って太鼓の音が聞こえてくる。

帝釈天・参道

有名な帝釈天、庚申祭の行列が来る。

近郊近在から集まった善男善女の群の中に景
氣の良いウチワ太鼓の大合奏が響き渡る。

行列の先頭をゆく名物の纏。

飴屋の店の前で眺めていた寅、肩にかけた派
手な格子縞の背広をクルッと脱ぎ、手にした
荷物と一緒に見物中の飴屋の店員に預けてズ
イと出る。

寅 「兄ィさん、代わろう」

纏持ち 「え？」

寅 「いいから貸しな」

ポカンとしている纏持ちの手から纏を奪い取るとウチワ太鼓の連中に向かい、大声をはり上げる。

寅 「さァ関東名物、柴又帝釈天の庚申祭だァ、爺

ちゃんも婆ちゃんも調子合わせてたたいてくれよ、ここは、柴又、題経寺とくらい！」

青空に高々と纏を突き上げ、回す。

太鼓の音、一きわ高く響く。

題経寺・境内

「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経」

寅の打ち振る纏を先頭に、お題目の声も一段と高らかに景気良く繰り込んで来る帝釈講の行列。

纏と太鼓の見事な息の合い振りに感心して見

本堂

物している参詣人たち。得意満面、ねじり鉢巻でウルトラC級の馬簾さばきを見せる寅に、一同の興味が集中する。

「誰だい、あの飛入りは……」

「見たことのねえ面だが……」

「誰だろう？ 土地の者かしら……」

得意絶頂の寅、大見得を切る。

寺の僧侶達、檀家の旦那達が立って寅の馬簾さばきを眺めている。

そのうしろから当山の山主日奏上人（御前様）が現われる。

日 奏 「ほう……なかなか見事な……？」

ふと寅を見て変な顔をする。

寅、日奏と眼が合い、ギョッとして立ちすくむ。僧侶達、何事かと日奏の顔と寅を見比べる。

寅、つと纏を小脇に抱え直すと主君の前に馳せ参ずる武者のごとく、タッタツと走り寄り、慌てて出て来た寺男の源さんをつきとばして日奏の眼下に蹴く。

寅 「御前様！……御前様でしょ……お久しぶりです

さんす、私です、寅です、もう憶えちゃいねえだろうなア、車平造の伴の寅次郎でござんす」

日 奏 「……」

日 奏、うなずく。

寅 「ホレ、庭先に入り込んじゃ、トンボ取りして、御前様に怒鳴られた不良の寅でござんす、

ねえ」

日 奏 「うん、憶えとる憶えとる」

寅 「え？……本当ですか憶えていますか……あり

がとうござんす」

叔母のつねがウチワ太鼓の行列の中からとび出して来る。

つ ね 「寅ちゃん……」

寅 「……」

つ ね 「寅ちゃんじゃないかい？」

二人、まじまじと顔を見つめあう。

寅 「よう、お婆ちゃん！」

つ ね 「……」

寅 「生きてたかい……おいちゃん、どうしたい、

おいちゃん……」

つ ね 「生きてるとも、ピンピンしてるよ」

寅 「そうかい……お婆ちゃん！」

と抱きつく。

竜造の家・とらや

庚申祭の夜。

参道沿いの小さな団子屋。

万灯に映える参道の情景が店を通して見えている。

とらや・仏間

灯明、線香を上げた仏壇の前で正座合掌して

いた寅、おもむろに向きをかえて、うしろに
並んでいる叔父の竜造とつねに對する。

何となく居ずまいを正す竜造とつね。

寅

「(両手をピッタリ畳について立派な挨拶をする)おいちゃん、おばちゃん、ただいま帰って参りました」

竜造とつね、びっくりして自分たちも畳に手をつかえる。

寅

「どうぞお手をお上げなすって、それでは挨拶になりません、さアお上げなすって……十年ひと昔の勘定でいきやちようどふた昔、父母も亡き兄も、さぞかし生前はいろいろとご迷惑をおかけしたことでございましょう」

寅

竜造「いやいや、迷惑なんてそんな……」

「弟の身もちまして一々高声に発します挨拶失礼さんです。ここに改めて厚く今までのご無沙汰のお詫びとお礼を申し上げる次第でございま

す」

寅 竜造「いやいやどうもどうも」

「なお、たった一人残りました愚かなる妹、無事に成長いたしましたについては、これひと重にお二人のご訓育の賜、まことに兄としてお礼の言葉もございません。おいちゃん、並びにおばちゃん、本当にありがとうございます」
寅、深々と叩頭する。

竜造とつねも両手について頭を下げる。

寅、表からのぞいてヒソヒソ噂している近所の人々にも挨拶する。

寅

「これはご町内の御一統様永らくご無沙汰いたしました。以後お見知り置かれましてよろしく引き立てお頼み申し上げます」

近所の人々、あわててお辞儀する。

寅

「さア、固苦しい挨拶はこのへんで終いにしと、おいちゃん、さア楽に、おばちゃんも楽に、さア」

つね「ほんとに立派になってお帰りになって……父

ちゃんや母ちゃんが見たらどんなにかね……

(涙ぐむ)」

竜造「ま、いいやな……何もねえけど一杯いこうじ

やないか、(近所の人達に)これはどうも失礼、

町内のお方どうぞ上がってください。一杯やっ

ていただいて……」

つね「どうぞ上がってくださいよ、さアさア……」

寅「ところでなにはまだかい？」

つね「え？ ああ、さくらちゃんかい、今日は残業

なんだよ」

寅「ほう、やっぱり残業なんかやってるの、へ

え、近所の紡績の女工でもやってるのか？」

竜造「とんでもない、さくらはキーパンチャーだ

ぜ、おい」

寅「キーパン、なるほど」

竜造「オリエントタル電機って会社知ってるだろ、あ

すこの電子計算機係なんだよ」

寅「電子やってるの、そりゃ大したもんだ。今の

世の中はなんだって電子だからね。そうそう、

忘れてた(持参の鞆を開けて中から何やらピカ

ピカ光る腕輪じみたものを取り出す)、こりゃ

お土産^{みやげ}ってほどのもんじゃないが、お婆ちゃん

ちよつとはめてみてくれよ、電子応用のヘルス

バンドってね、電子の力で体中の毒素という毒

素を追いつ出し、新陳代謝がずうっとよくなっち

まうんだ、さア手にとって……」

つね「いいのかい、こんな立派なもの」

寅「あ、いいよ」

竜造「これ、金じゃねえのか」

寅「冗談じゃねえ、これが金なら十万や二十万じ

ゃ買えやしねえよ、でもね、断わっておくけど

ガセネタじゃねえんだ。論より証拠で使ってみ

りやすぐわかる。つまりこの電子のツブツブみ

てえなもんがね、手首から血管を伝って五臓六

腑^ぶを駆けめぐるんだよ、つまり血行を良くする

わけだ。そら、おばちゃん、何となく身体がすうっと軽くなったような気がしないかい？ 特に効くのは高血圧に神経痛、俗に血の道といわれる婦人病……ご近所の方こっちへ入って（店からのぞいている近所の人々に）さア見てやってください」

寅、近所の人々のうしろに一人の娘が入って来るのを見て言葉を止める。

つねが声をかける。

つね「あら、さくらちゃん、お帰り」

寅「さくら?!」

さくら「ただいま」と答えて、寅や一同を不審そうに見つめる。

寅、むっくりと立ち上がり、さくらに近づく。

寅「さくら（マジマジとさくらの美しい顔に見惚れながら……）ほんとうに、お前がさくらかい」

さくら「（気味悪げに後じさりする）……」

寅「俺だよ、この面（つら）に見覚えはないのかい？」

さくら「あのう……？」

寅「さくら……」

肩に手をかけようとするが、さくら、思わず後じさりする。

二人を遠巻きにして見守る近所の人々。

さくら、眼を大きく開いて寅を凝視（ぎょうし）する。

さくら「ね、この人、誰なの」

つね「いやだよ、まだわかんないのかい」

竜造「よく見なよ」

さくら「……」

さくら、まじまじと見る。

寅「いいんだいいんだ、無理もねえ、五つや六つのガキの時分にほっぽり出してそれきりだもんな……親はなかつとも子は育つていうが、でかくなりやがった……（さくらを上から下までなめるように眺め回す）」

さくら「(気がつく) あ……」

寅「……」

さくら「あの……お兄ちゃん?……」

寅「(感動して) そうよ、お兄ちゃんよ……」

さくら「生きてたの……」

さくら、呆然としている。

寅、もはや涙声でうなる。

さくら「(思わず) お兄ちゃん」

寅「さくら(感動^{きんどう}まって、思わずさくらの手を

グイと握りしめる) 苦勞をかけたな?……ご苦

勞さん!」

思わずもらい泣きするつね、芝居でも見るように興味津々^{しんしん}見守っている一同。

寅、やっとう手をはなし、鼻をすすり上げる。

激情のあと気まずい沈黙が流れる。

寅「……ションベンしてくら?」

と裏のほうへ向かう。

竜造「おい、便所ならこっちだよ」

寅「いいんだ、いいんだ」

そのまま裏庭に出てゆく。

つね、ポカンとしているさくらに声をかける。

つね「よかったね」

口々に一同、祝福する。

さくら、照れくさそうにペコリと頭を下げる。

寅の歌声が聞こえてくる。

とらや・裏庭

こわれかけた塀のすぐ向うが小さな印刷工場になっている。

寅、小便をしながらしんみりした表情で歌っている。

寅「泣くな妹よ 妹よ泣くな 泣けば幼い二人

して 故郷を捨てたかいがない……」

とらや・二階のさくらの部屋

さくら、入って来て壁にかけてある二十数年
前の家族の写真を見る。父親の横に秀才らし
い中学生の長兄、母親の膝に抱かれたさく
ら、そして端っこにおどけた身ぶりをした小
学生の寅がいる。

とらや・裏庭

寅、気持よくテノールの声を響かせ、歌い終
わり、小便を終える。

帝釈天・参道

朝日がさしている。

とらや・さくらの部屋

掃除しているさくら。

つねが呼びにくる。

つね「さくらちゃん」

さくら「はい」

つね「ちょっと来てちょうだい」

さくら「はい……なあに？」

つね「ちょっとちょっと」

印刷工場・博の部屋

工場の二階、工員の諏訪博、窓から顔を出
す。

とらや・縁先

二日酔いの竜造、布団の上に坐っている。そ
の横につね。さくら、縁側にかけている。

さくら「いいわ、私一人で行くから」

つね「とんでもない！ 駄目^{だめ}だよ、そんなこと出来

る訳ないだろう、向うさんはご両親から妹さん

まで見えるんだよ」

さくら「仕方ないじゃない、今さらおじちゃんが二日
酔いだからって日延べしてもらう訳にはいかな

いでしょ」

つね「でもさ、一人でなんか行ったらこの話駄目に
なっちゃうよ」

さくら「いいわよ、どうせ部長さんがムリヤリに押し
つけた話なんだもん」

つね「またそんなことを言っていて……こんない話は
今まであったかい？」

さくら「じゃ、どうすればいいって言うの？」

つね「どうすれば……困っちゃうよ、本当に馬
鹿だったらありやしない、昨夜あれほど私がほど
ほどにしなさいって言ったのに」

と泣き声で竜造を責める。

寅「よう、おばちゃん、いったいどうしたって
うんだい」

つね「いえね、今日はさくらちゃんのお見合いの日
なんですよ」

寅「ほう、さくらのお見合い……で、これのこと
欲しいってのはどこの誰だい」

ネジリ鉢巻をした竜造が蒼白い顔で口をはさ
む。

竜造「それがさくらの会社のな」

つね「うるさいね、お前さんはだまっておいで！
何だい出来損いの酔っ払い」

竜造「そうガンガン怒鳴るなよ、頭に響くって……」
つね「何言ってるんだい！」

寅「まアまアおばちゃん、喧嘩（けんか）はいいから。それ
でいったいどういうことになってるんだ」

つね「とってもいい話なんだよ。オリエンタルの下
請会社の社長さんがさくらちゃんを見染めて
ね、ぜひ自分の俵（はた）の嫁（よめ）になって、部長さんを通して
言ってくださってね、それで今日はおじや
んがつきそいで見合いにいくはずが昨夜飲みす
ぎちゃってこの有様（ようさま）だろ、さくらちゃんは今さく
らちゃん一人で行くなんて言い出すし」

さくら「だって私は最初から乗り気じゃないって言っ
てるでしょ」